

【作品タイトル】

悪いものでも食べたのか

【元にした作品のタイトル】

なし

【著者名】

南 伸太郎

【あらすじ】

漬物を食べた翌朝、男の部屋に「担当者」が現れる。担当者は現実を変える副作用だと言い、日常を維持しようと男の行動を制限するが、変化を望む男は再び漬物を口にする。その瞬間、新たな担当者が現れ、変わったのは現実でなく自分自身だと悟る。

【特記事項】（概要、アピールポイント等）

食べ物という身近な存在をトリガーとして、日常に潜む非日常が顕在化する現代幻想小説をめざした。退屈な日常からの脱却願望と、変化への恐怖という人間の内的葛藤をもう一人の自分である「担当者」をとおして描いた。

【本編の文字数】

三〇〇七文字

悪いものでも食べたのか

金属が擦れるような音がして目が覚めた。ベッドの脇に置いてあるスマホに手を伸ばそうとしたが、体が動かない。朝日はまだ昇っていないようだ。暗さに次第に目が慣れてきた。部屋の隅に知らない男が立っていることがわかった。年齢は三十歳代の半ばくらい、背は高くも低くもない。スーツ姿で、ネクタイがやけに長く、床に届きそうだった。

「おはようございます」

あまりにも自然に挨拶されたので、反射的に「おはようございます」と返した。いや、違うだろ。昨夜は一人で寝たはずだ。玄関も窓も鍵をかけた。この男はどこから侵入したのか。

「わたくしは、あなたの担当です」

「担当？」

「ええ、本日から。あなたは、昨日の夕食で悪いものを食べましたよね」

「は？」

「もつとも、『悪いもの』というべきかどうかは、あなた次第ではありませんが」

男は淡々と言う。昨夜の夕食は、スーパーの総菜コーナーで買ったアジフライと、冷蔵庫の残りのきゅうりの漬物、それにインスタントの味噌汁だ。どれも「悪いもの」ではなさそうだ。

「いや、腹も痛くないし」

「そういう類の悪いものではないんですよ」

男は長いネクタイを指先でいじりながら言った。そして勝手に冷蔵庫を開け、中を覗き込み、「これですね」ときゅうりの漬物を取り出した。

「これに入っていたのは、物質としてはただの調味液です。でも、副作用は、まあ、説明しても理解しづらいでしょう」

「何の副作用だ」

「現実を少し変える副作用です。食べた人の周囲の一部を理屈に合わない形に変えてしまふ。あなたの場合、それがわたくしです」

「つまり、お前はきゅうりの漬物の副作用ってということか？」

「まあ、そう言ってもよいでしょう」

どうやら男は、俺の意識の中に現れた幻覚ではなく、物理的に存在するようだ。触れようとすれば触れることができるし、足音もするらしい。目の前で歩いて見せたが、金属が擦れるような音がした。目が覚めたのは、男の足音のせいだ。

「で、担当って何をするんだ？」

「あなたがこの『変わった現実』に適応できるよう手助けするんです。わたくしはもう一人のあなたみたいなものです」

「もう一人の俺？」

その日から、男は俺にびったりと付き添った。

朝食を食べれば、耳元で「今日は牛乳の味が少し甘く感じますよね。現実の修正が入っています」と解説する。

会社に行けば、会議室の隅で平然とメモを取っている。誰も男を気に留めない。後で聞けば、「わたくしの存在は、あなた以外には認識されない仕様です」とのことだった。

不便なのか便利なのかわからない。

ある晩、俺は男に聞いた。

「この現実の変化って、放っておいたらどうなる？」

「大きくなるか小さくなるか、どちらかですね。大きくなれば、あなたの生活は別の形に変わりますし、小さくなれば、わたくしは消えます」

「どっちがいいんだ？」

「それはあなた次第です」

そう言いながら、男はわずかに視線をそらした。その横顔に、一瞬だけ寂しさがよぎったように見えた。あるいは、ただの気のせいだったかもしれない。

男が現れてからもしばらくは、朝はパンかご飯かで悩むことすらなく、昼食用に同じスーパーで同じ総菜を買い、同じ時間の電車に乗り、会社では自分の発言が誰にも届かない、そんな退屈な日常が続いていた。あの男が、俺の側にいつもいる以外は、何も変わりはないじゃないか。

そういう生活が二週間くらい続いただろうか。ある日の夕方、取引先との打合せ中、俺は妙な既視感に襲われた。相手の口から出てくる言葉が、数秒前に頭の中で流れたのと同じなのだ。

「これも、漬物のせいなのか？」

小声で尋ねると、男はうなずいた。

「時間のズレ。これは軽度な副作用です」

それから数日が経つごとに、世界は少しずつ歪んでいった。

部屋の隅の家具の配置が、記憶とわずかに違う。エレベーターに乗ると、階数表示が「5」「6」「7」「乙」「9」と進む。郵便受けに届いた封筒の宛名は俺の名前だが、漢字が一文字だけ違う。公園にいる鳩が、人間の声で「おかえり」と鳴く。木曜日の午前中が二回繰り返し返される。

「これも副作用か？」

「いえ、これは余波です。あなたの現実は変わり始めている」

恐怖はなかった。むしろ、退屈な日常がほぐれていくようで、愉快に思えた。

その一方で、男は「あなたを助ける」と言いながら、俺の行動を制止するようになる。窓を開けようとすると、「今夜は窓は開けないで。外の空気は、あなたの体を裏返してしまう」といい、「シャワーの時間は七分以内にしてください。それ以上だと、水の音で現実との境界が曖昧になります」と、時間の制限をする。着信も逐一確認して、「その電話には出ないでください。経理部の前原からですね？ 彼の声の周波数が、この変化した現実と干渉します」と忠告する。

俺がもう一本ビールを開けようとすると「それ以上はやめたほうがいい」と止めてくるようになった。「最近、指図が多くないか？」と笑って聞けば、「いいえ。指図だなんて。ここでそれをする、変化の速度を早めてしまいますので、お知らせをしているまでです」と答える。男の声が耳にこびりつき、俺の呼吸が浅くなる。

「現実があまり変わらないと、お前は消えてしまうんじゃないのか。消えることを望んでいるのか？」

こいつは俺を守っているのか、それとも俺を閉じ込めているのか。ひよつとすると、男が言ったこととは逆で、現実があまり変わらなければ、ずっとこの男は存在することができて、現実が大きく変わってしまったら、俺の前から消えてしまうんじゃないのか。男の「わたくしはもう一人のあなたみたいなものですよ」という言葉が、頭の中で何度も反響した。もし男がもう一人の俺なら、この退屈な日常を無意識に望んでいたのは、俺自身だったということになる。男が現実を変えさせまいとするのは、変化を恐れるもう一人の自分つまり、会社と家を往復するだけの生活に安住しようとする俺自身なのか。

「もし俺がこのまま、この現実を受け入れたらどうなる？」

忠告を無視して、ベランダに出て、四本目の缶ビールを飲みながら訊くと、男は月を見上げて答えた。

「あなたは、元の現実に戻れなくなります」

「戻れない？」

「でも、それは必ずしも悪いことじゃないんですよ。現実はもともと不完全ですから」

次の日の仕事帰りに、俺はスーパーで、今度はなすの漬物を買った。

「続けるんですね」

「せっかくなら、もっと見てみたい。変わった『現実』というやつを」

その夜、なすの漬物を口に運んだ瞬間、部屋の中に新しい人物が現れた。

白い着物を着た小柄な女の子だ。こちらを向いて微笑むと、まるで昔から知っているような懐かしさを感じた。

「はじめまして。私、あなたの担当です」

隣に並んだ男が小さく笑った。

「これであなたの生活は、もっとおもしろくなりますよ」

小柄な女の子が言う。

「こういう仕組みなんだな」

「現実が少し変わったでしょう？」

男はあごひげを触りながら言う。この男にあごひげなんて生えていたか。

「いいや、そうじゃないんだ」

「と言いますと？」

小柄な女の子が、少し背伸びをして、男の床に届きそうな長さのネクタイをきつく結び直した。

「変わったのは、現実じゃなくて、俺自身なんだ。もしかしたら、ずっと前からこの『悪いもの』を求めていたのかもしれない」

俺がそう言い終わらないうちに、男は玄関から出ていった。金属の擦れるような音を立てながら。